

平城京出土軒瓦の新種・参考資料について

原田憲二郎

I はじめに

2021年5月13日と2023年10月6日に、奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・大和郡山市教育委員会・奈良市教育委員会の瓦研究者によって、軒瓦型式検討会が実施され、平城京・藤原京出土軒瓦の型式・種の新設定および変更等について検討が行われた。

このうち2021年の奈良文化財研究所所蔵分の検討結果については、その概要が報告されている（今井・林2023）

本稿では、2021年と2023年の軒瓦型式検討会を経た奈良市教育委員会保管の軒瓦のうち、新種が設定された軒瓦と、参考資料となった軒瓦について以下に紹介する。

II 平城京出土軒丸瓦の新種

6301型式K種 6301型式ではB・C・J種とほぼ同程度のやや小型の軒丸瓦である。内区に複弁8弁蓮華紋を飾り、弁の子葉は6301型式B・C・Jと比べ、や

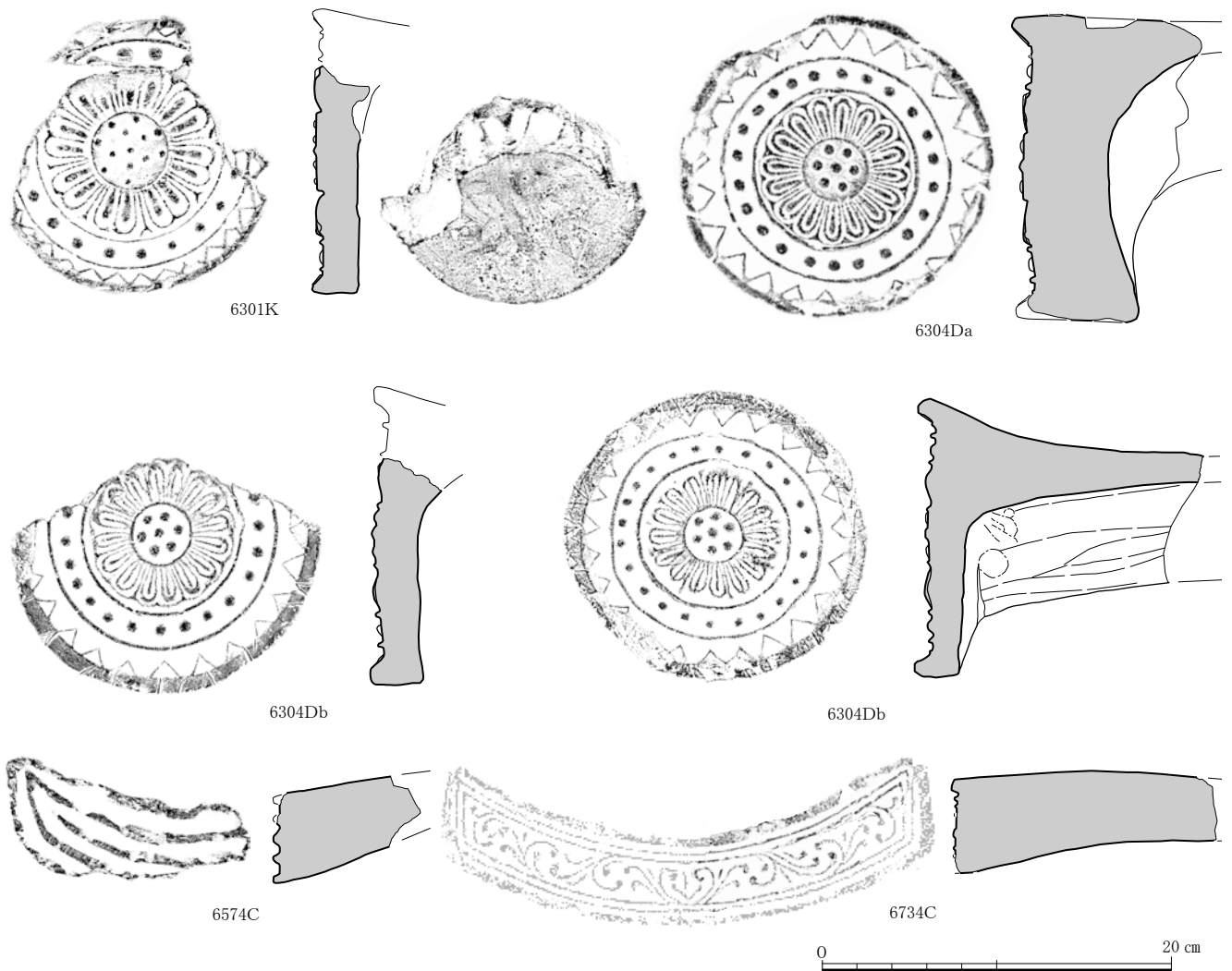


図1 平城京出土新種の軒瓦（1/4）

や太めな点は特徴的である。中房蓮子配置は1 + 5 + 8で、この配置は、蓮子配置が不明である6301型式E・F種を除けば、6301型式で唯一である。外区内縁に珠紋、外区外縁に線鋸齒紋をあらわす。外縁頂部に凹線をめぐらさない点は、6301型式C種と共通する。

6301型式は瓦当裏面に布目痕跡を残す布目押圧技法による製作と確認できるものが多いが、瓦当裏面にタテナデ、瓦当裏面周縁にはこれに沿うナデをほどこしており、布目痕跡は確認できない。ただし丸瓦部剥離痕に指頭圧痕が確認できる。瓦当下半部側面はヨコナデをほどこす。

胎土は密、焼成はやや軟質、表面黒灰色、内部白灰色を呈する。

6301型式の小型品で、外縁頂部に凹線をめぐらさない点は6301型式C種と同じであることから、C種と同じ平城宮・京瓦編年¹⁾の第Ⅱ－2期(729～745)に属すると考える。

6301型式K種は左京一条三坊十二・十三坪から1点(奈良市教委2022)、左京二条四坊十坪から小片が1点²⁾出土している。

6304型式D a種・D b種 大安寺創建軒丸瓦6304型式D種には範を彫り直したものが確認でき、彫り直し前をD a種³⁾、彫り直し後をD b種⁴⁾と設定された。

D b種は中房圈線を彫り加え、蓮弁の輪郭、子葉と間弁の一部を彫り直す。間弁が蓮弁のまわりを巡る部分は彫り直しておらず、範の傷みが進行した資料では、その部分が磨滅した結果、独立した間弁をもつ単弁蓮華紋に見えるものがある。

瓦当上半部はタテケズリ、瓦当側面下半部はヨコケズリ。丸瓦接合位置はD a種より低い。脱範後、外縁頂部を0.5cm程度削り、平坦面をつくる点はD a種と異なる特徴である。瓦当裏面丸瓦接合線に沿って、指頭による押圧を加える。瓦当裏面下半部はヨコケズリ。周縁に沿って、半周する指ナデを加えるものもある。丸瓦部凹面には縦方向のユビナデを施す。D b種の瓦当厚は2.0～3.0cmのものと、4.0～4.5cmのものの2種に分けることができ、瓦当厚5.0～7.0cmを測るD a種に比べて薄手である。胎土は密である。焼成・色調は、硬質で灰色を呈するものと、やや軟質で褐灰色を呈するもの、さらにやや軟質で表面黒色、内部暗灰色を呈するものの大きく3つに分類できる。

6304型式D b種は紋様・技法上の諸特徴から、年代的に大安寺創建軒丸瓦6304型式D a種と、最初の大安寺式軒丸瓦6138型式E種の間に位置付けられる(原田

2011)。

なお、令和5年までに奈良市教育委員会による大安寺の調査で出土した6304型式D a種は100点、6304型式D b種は73点である。この他小片の為、D a種かD b種か区別できない6304型式D種が56点ある。

Ⅲ 平城京出土軒平瓦の新種

6574型式C種 二重郭紋の中央に単弧線を加えた6574型式であるが、既知のA・B種とは郭線・弧線の幅・高さが異なる。郭線断面形状は台形であるが、上辺を支える脚が長い。郭線間の断面形は「U」字形で、郭線間の間隔は約0.5cm。

顎部断面形態は顎用粘土を貼り付け、削り出した直線顎⁵⁾である。顎用粘土剥離面には、縦位の縄タタキ目が残し、瓦当部の成形法は複数の粘土板を貼り重ねた「粘土板貼り重ね技法」⁶⁾とみられる。凹面瓦当上縁付近はヨコケズリをほどこし、特に中央付近は深く削る。以下は糸切痕と布目痕を残す。凸面はタテケズリ。胎土は密で、焼成は軟質である。色調は表面黒灰色、内部灰白色を呈する。

左京二条四坊二坪から2点(奈良市教委1989 a)と、左京二条四坊七坪から1点出土⁷⁾している。

6734型式C種 6734型式は内区に桐葉形を中心葉が囲む中心飾りをもつ唐草紋を飾る。外区と内区の境には、2重に界線をめぐらす。既知のA・B種とは内区唐草紋様が異なるが、信濃国分寺創建軒平瓦は同範である⁸⁾。

顎部断面形態は直線顎である。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリ、以下は布目痕を残す。凸面はタテケズリ。

胎土はやや粗く、焼成はやや硬質、灰色を呈する。

平城京右京二条二坊十六坪で鎌倉時代の瓦積井戸の枠材として1点(奈良市教委2006 b)出土した。

Ⅳ 平城京出土軒丸瓦の参考資料

検討を行った結果、既知の紋様でないことは確実だが、小片の場合は、全体の紋様が判明するまで型式・種の設定を保留する。また奈良時代と断定できないものの場合も設定を保留する。こうしたものを参考資料と呼ぶ。

また、平城京に運ばれたことが判明した軒瓦で、すでに在地の報告書等で型式設定がなされているものについても、参考資料とすることとなった。

ここでは、まず参考資料の軒丸瓦について紹介する(図2)。

図2－1は重圈紋である。圈線は高さ0.5cm、基底幅

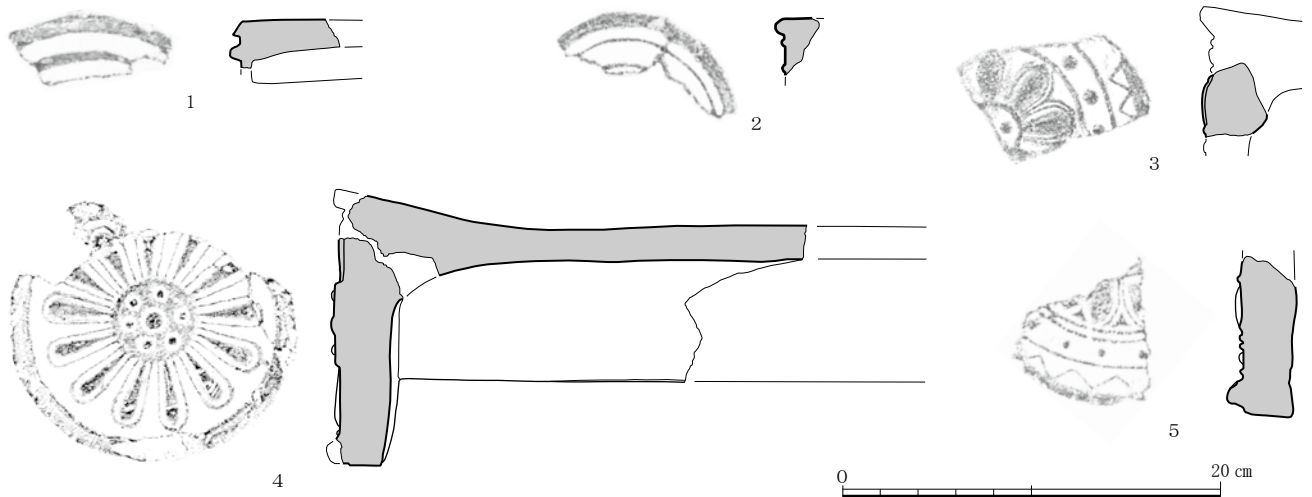


図2 平城京出土参考資料の軒丸瓦 (1/4)

0.8cmで、断面形状が台形を呈する。

外縁は脱範後、斜め方向にカットする点特徴的である。瓦当上半部はタテケズリをほどこす。胎土は密で、焼成は軟質である。色調は表面黒灰色、内部灰白色を呈する。左京二条四坊三・四坪間の条間路南側溝から出土した(奈良市教委 1993 a)。小片の為、良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図2-2は小型の重圏紋である。圏線断面形状は半円形で、圏線幅は0.3cmと狭い。外縁とその内側の圏線の間は狭く、このことは6012型式A種等、比較的古手の重圏紋にみられる特徴である。

瓦当上半部はタテケズリをほどこす。胎土は精良で、焼成は軟質である。色調は淡灰黄色を呈する。左京一条三坊十三坪で、9世紀初めの井戸周囲の石敷から出土した(奈良市教委 2001)。小片の為、良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図2-3は盛り上がった蓮弁が特徴的な、単弁蓮華紋である。間弁は弁輪郭線に沿うようなY字状で、弁数は12弁の可能性が考えられる。外区内縁は珠紋を、外区外縁は線鋸歯紋をめぐらす。間弁の形状などから6130型式あるいは6134型式に属するとみられる。

胎土はやや粗く、焼成は軟質である。色調は表面黒色、内部灰色を呈する。

左京五条四坊十五坪から出土した(奈良市教委 2010)。小片の為、良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図2-4は内区に単弁13弁蓮華紋を飾る。中房の蓮子配置は1+6で、中心蓮子は周囲の蓮子より一回り大きい。蓮弁は輪郭線で囲まれた子葉からなる。外縁は素

紋の直立縁である。範傷は弁端と外縁の間に1箇所、さらにその弁の2つ右の弁では、弁輪郭線と子葉を繋ぐ傷が確認できる。

瓦当裏面に接合溝を設け、先端部が無加工の丸瓦を接合する。瓦当上半部と瓦当側面下半部は縦方向のケズリを施す。瓦当裏面は横方向のケズリを施した後、部分的にナデで調整する。瓦当側面下半部の一部には瓦当面から1.2cm幅でめぐる面があり、範の側面の痕跡とみられる。丸瓦側端面の瓦当部付近には、乾燥時に付いたとみられる横方向の棒状圧痕が認められる。胎土は密で白灰色の砂粒を含む。焼成はやや軟質、色調は白色である。

兵庫県加古川市の古大内遺跡(賀古駅家)出土品を標式名とする古大内式軒丸瓦Ⅰ型と同範である(原田 2013)。製作技法・胎土・色調は播磨出土品と大きな違いは認められず、播磨で製作され、平城京内に持ち込まれたとみてよい。左京五条四坊一坪で1点(奈良市教委 2017)、左京五条四坊八坪で11点(奈良市教委 2020 他⁹⁾)、左京五条四坊九・十坪間の条間北小路南側溝から1点(奈良市教委 2012)、興福寺境内で1点(奈文研 2016)が出土している。すでに兵庫県内の遺跡で型式設定がなされているため、参考資料となった。

図2-5は内区と外区の間に2重の界線が巡るのが特徴的である。中房からのびる弁の輪郭線は、界線に接続する。間弁は短く三角形状である。外区内縁に珠紋を、外区外縁に線鋸歯紋をめぐらす。外縁の形態は内面が内傾する傾斜縁である。

瓦当裏面は粗いタテ方向のナデをほどこす。瓦当側面には瓦当面から0.9cm幅でめぐる範端痕が確認できる。胎土は粗く、焼成はやや軟質で、灰色を呈する。

左京五条四坊坊間東小路東側溝から出土した（奈良市教委 2012）。福寺池採集品（佐藤亜聖他 2017）は同範である。左京四条三坊九坪の東堀河出土品（榎考研 2007）も同範の可能性が高い。これらの資料から、蓮弁は複弁 7 弁と単弁 1 弁の複弁単弁混合紋とわかる。今後の良好な出土資料を待って型式設定することとし、参考資料となった。

V 平城京出土軒平瓦の参考資料

ここでは参考資料の軒平瓦について紹介する（図 3）。

図 3-1 は単郭紋の中央に単弧線を加えた紋様構成である。単郭紋左右上隅が長くのびる点は特徴的である。

顎部断面形態は直線顎。凸面はタテケズリ。凹面は布目痕を残すが、瓦当上縁付近と狭端部付近はヨコナデをほどこす。胎土は粗く、焼成は堅緻で、灰色を呈する。

左京一条三坊十二・十三坪で出土した¹⁰⁾。難波宮出土軒瓦の型式を参考にすれば、6571 型式となる。しかし、やや小型の軒平瓦であること、郭線左右両端に不自然に残る部分があることから、範は 2 重郭で、脱範後に外側の郭線を削り取った可能性が残る。このため、もう少し同範資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図 3-2 は 2 重郭紋である。郭線断面形状は台形。郭線間の断面形は V 字形。郭線間の間隔はほとんど無い。

顎部断面形態は顎面の長い段顎Ⅰである。凸面は顎面ヨコケズリ、顎段部はヨコ方向の指ナデで丸く仕上げる。顎面端部には凹型調整台の圧痕が残る。平瓦部は粗いタテケズリ、凹面はヨコケズリをほどこす。胎土は粗く、焼成はやや軟質で、白灰色を呈する。

左京二条三坊十坪で出土した（奈良市教委 2009）。既知の 6572 型式に同範品はないが、瓦当紋様の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図 3-3 は中心飾り左端部から左第 2 単位の均整唐草紋が残る。上外区は珠紋を、下外区には線鋸歯紋をめぐらす。唐草紋の形状は 6661 型式に似る。

顎部断面形態は顎面をもつ曲線顎Ⅱである。凸面はタテケズリ、顎面はヨコケズリをほどこす。凹面瓦当上縁付近はヨコケズリである。胎土は密で、焼成は堅緻、灰色を呈する。

元興寺寺地北辺で、15 世紀の井戸から出土した（奈良市教委 2006 a）。今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図 3-4 は左上端部の小片である。内区の子葉の先端に 2 つの珠点を配する点は特徴的である。上外区には、先端部が上下の界線に接続しない細かい線鋸歯紋をめぐ

らす。脇区は珠紋を配する。

凹面は粗いタテナデをほどこす。胎土は緻密、焼成は硬質で、暗灰色を呈する。

左京五条五坊十三坪で出土した（奈良市教委 1998）。変形葡萄唐草紋とされる和田廃寺のⅢ型式軒平瓦（花谷 2000）と同範であり、十三坪では他にも和田廃寺と同範とみられる軒丸瓦が出土している（原田 2002）。このようなことから、これらが十三坪東隣に想定される葛木寺の瓦であり、和田廃寺を葛城尼寺とする考えを補強するものと評価できる（原田 2020）。和田廃寺で型式設定されていることから、参考資料となった。

図 3-5 は右端部の破片である。左京九条三坊六坪の 8 世紀後半の井戸枠内から出土した（奈良市教委 2021）。内区右端の唐草が上方に巻き込み、上・下外区と脇区に杏仁形珠紋をめぐらす。

顎部断面形態は直線顎。凸面はタテナデ。凹面もタテナデするが、瓦当上縁付近はヨコナデ調整する。胎土は粗く、焼成は軟質、灰色を呈する。

6692 型式の一種とみられるが、今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図 3-6 は右半部片で、内区唐草紋は連続し、唐草先端に三葉紋風の蕾を持つ点は特徴的である。外区は素紋。

顎部断面形態は、顎面をもつ曲線顎Ⅱとみられる。凸面はタテケズリ。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリし、以下は布目を残す。胎土には砂粒と黒色のシャモットが多い。焼成は硬質で灰色を呈する。

平城紀寺の寺院地内と想定される左京五条七坊十三坪から出土した（奈良市教委 1989 b）。寝屋川市高宮廃寺 NHⅠ型式軒平瓦と同範であることが判明（原田 2020）し、全体の紋様構成が明らかとなった。唐草の反転数は異なるが、中心飾りの垂飾りが水滴形である点や、唐草が連続する点と各唐草先端の形状は大安寺式軒平瓦 6717 型式 A 種に似る。高宮廃寺 NHⅠは曲線顎Ⅱである。高宮廃寺では平城京と同範の軒丸瓦 6314 型式 A 種と組む（寝屋川市教委 2018）。平城京では平城宮・京瓦編年第Ⅳ期と考える 6316 型式 U 種と組む可能性が高いこと、唐草各単位間に三葉紋風の支葉を配する軒平瓦は 6761 型式 A 種や 6763 型式 A 種・6764 型式 A 種等、第Ⅳ期に盛行していることから、平城宮・京瓦編年第Ⅳ期（757～770）の瓦と考える（原田 2020）。高宮廃寺で型式設定されていることから、参考資料となった。

図 3-7 は右上の小片である。内区右端の唐草は上方向に巻く。外区には珠紋をめぐらす。上外区には縦断する範傷が確認できる。

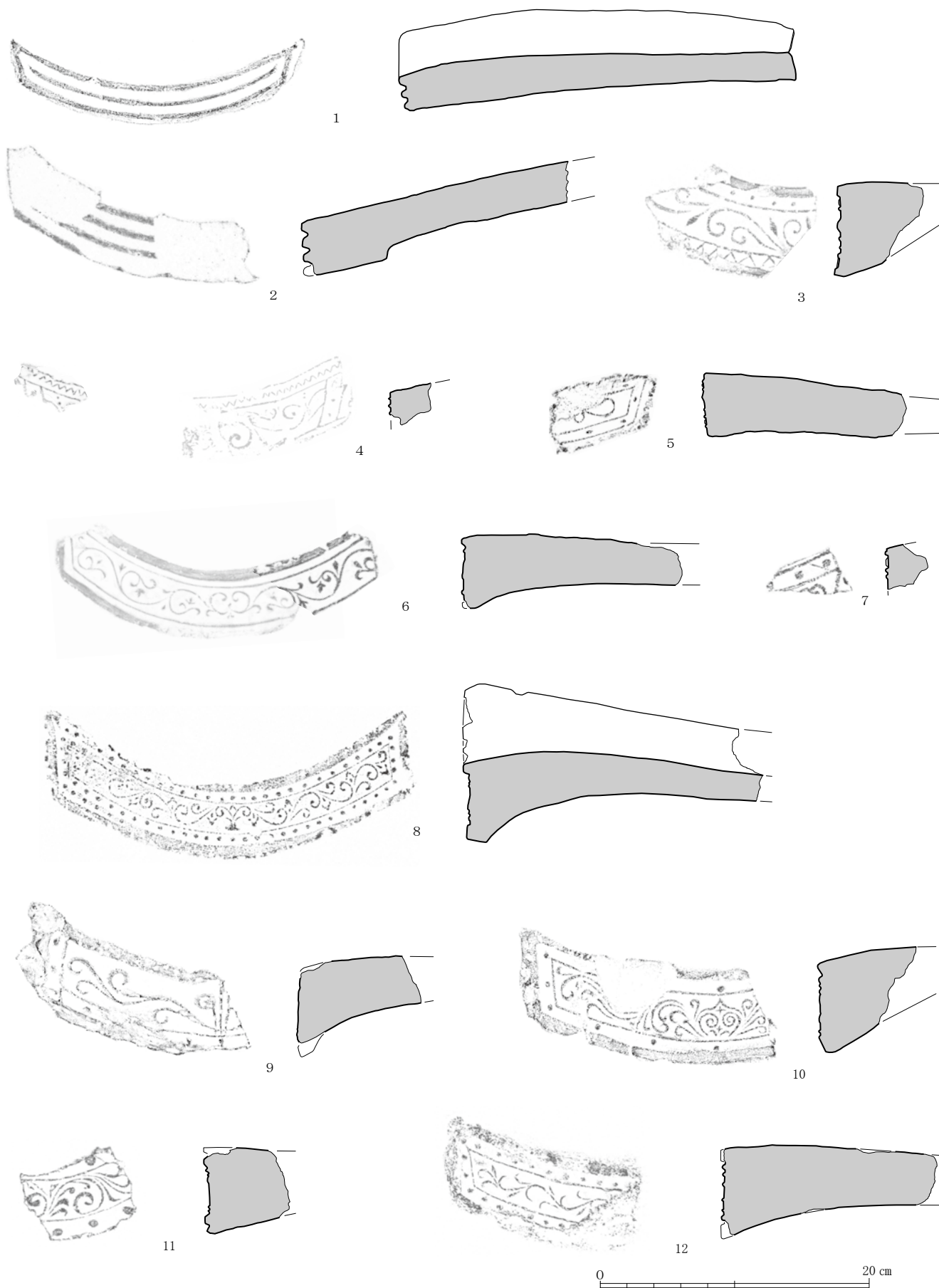


図3 平城京出土参考資料の軒平瓦 (1/4)

胎土は密、焼成はやや軟質、赤灰色を呈する。

元興寺修理所推定地から出土した（奈良市教委 1987）。元興寺採集品（梶山 2006）は上外区を縦断する範傷が確認でき、同範の可能性が高い。東大寺千手堂出土品（平松 2008）、東大寺仏餉屋出土品（石田 2016）、興福寺北僧房採集品（保井 1928・平松 2008）も同範の可能性が考えられる。今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図 3-8 は内区に樹状の中心飾りを置く 5 回反転均整唐草紋を飾る。唐草は各单位に山形の蕾を配する。外区には小粒の珠紋を密にめぐらす。中心飾り直上の珠紋とその左側の珠紋の 2 箇所範傷が確認できる。

顎部断面形態は顎面をもつ曲線顎Ⅱである。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリ、以下は狭端に向けてタテケズリをほどこす。凸面はタテケズリを施し、顎面はヨコケズリをほどこす。平瓦部の側面はケズリで成形した後、凹面側の角を面取りする。胎土は密で白灰色の砂粒を含む。焼成はやや軟質、色調は概ね白色であるが、表面の一部は黒灰色である。凹面瓦当付近の両側縁には、横方向の棒状圧痕が認められる。

左京五条四坊八坪から 2 点（奈良市教委 2020 他¹¹⁾）と、九坪南側の五条条間北小路北側溝から 1 点（奈良市教委 2004）出土した。古大内式軒平瓦と同範である（原田 2013）。製作技法・胎土・色調は播磨出土品と大きな違いは認められず、乾燥時についたとみられる横方向の棒状圧痕は小犬丸遺跡（布勢駅家）出土古大内式軒平瓦に類例が認められる（兵庫県教委 1987）ことから、播磨で製作され、平城京内に持ち込まれたものとみてよい。古大内式軒平瓦は範傷の進行の少ないものを甲類、多いものを乙類と分類でき、古大内遺跡では甲類が、小犬丸遺跡では乙類が多く出土していると報告される（今里 1992）。平城京出土品は範傷の少ない甲類で、比較的早い段階で生産されたものが搬入されているとみられる。すでに兵庫県内の遺跡で型式設定がされているため、参考資料となった。

図 3-9 は縦線とその左右の上向きの唐草紋を中心飾りとする、3 回反転唐草紋を内区に飾る。唐草は途切れず、連続する。外区に珠紋を巡らす、上外区は無い。

顎部断面形態は曲線顎Ⅱである。顎面はヨコケズリ。凸面は瓦当から顎部にかけてはタテナデ、以下ナナメ縄タタキ痕を残す。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリする。胎土は密でマーブル状を呈する。焼成は軟質である。色調は表面が黒灰色、内部は橙灰色を呈する。

左京五条四坊七坪の西辺を画する溝から 1 点出土し

た¹²⁾。保良宮に比定される大津市石山国分遺跡出土軒平瓦 K H 05 と同範である¹³⁾。製作・調整技法に違いはみられず、胎土の状況も似ており、近江国から運び込まれたものと考えられる。すでに石山国分遺跡で型式設定がなされているため、参考資料となった。

図 3-10 は、下から派生する三葉形を、左右に分離して対向する唐草が囲み、その上に対葉花紋を配する、いわゆる東大寺式軒平瓦に似た中心飾りを持つ。対葉花紋下に十字形を配する点は特徴的である。唐草は不明な点が多いが、左第 1・2 単位を見る限り、かなり分解している。

顎部断面形態は曲線顎Ⅱである。瓦当面中心付近の下外縁は脱範後ヨコケズリをほどこして、面取りする。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリし、以下は布目を残す。凸面はタテケズリをほどこす。胎土は粗く黒色のシャモットを多く含む。焼成はやや軟質。色調は表面が黒灰色、内部が橙灰色を呈する。

西隆寺跡推定塔跡の基壇掘込地業から出土した¹⁴⁾。紋様構成から平安時代初めの軒平瓦の可能性が高く、今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図 3-11 は中心飾りと右第 1・2 単位部分の小片であるが、6732 型式もしくは 6733 型式に属する均整唐草紋とみられる。外区は珠紋をめぐらす。

顎断面形態は直線顎である。凹面はヨコケズリ、凸面はタテケズリをほどこす。胎土は密で、黒色のシャモットを多く含む。焼成は硬質で青灰色を呈する。

元興寺西室北階小子房の調査で、13 世紀中頃の土坑から出土した（奈良市教委 1993 b）。6733 型式Ⅰ種の未知の紋様部分の補完資料の可能性もあるため、参考資料となった。

図 3-12 は内区に 5 回反転均整唐草紋を飾るとみられる。唐草紋は主葉 1・支葉 2 を 1 単位とし、6721 型式Ⅱ種に似る。外区には小粒の珠紋を密に巡らす。

顎部断面形態は曲線顎であるが、瓦当下面部が欠損しており、曲線顎ⅠかⅡかは不明である。凹面は丁寧なナデを、凸面はケズリをほどこす。胎土は粗く、焼成は硬質、灰色を呈する。左京一条三坊五坪で、9 世紀初めの井戸の枠内から出土した（奈良市教委 2007）。平安時代初めの軒平瓦の可能性もあり、今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

Ⅳ おわりに

2021・2023 年の 2 度の軒瓦型式検討会で検討された奈良市保管分の軒瓦は、軒瓦型式検討会の開催が 2000

年以来ということもあり、軒丸瓦 12 点、軒平瓦 22 点と多い。未発掘区の多い平城京内からは今後も多数の新型式・新種の軒瓦が出土することが予想される。

なお、型式・種の設定がなされていたものの、欠損部分の紋様を補完する資料もある。これについては、稿を改めて紹介したい。

謝辞

本稿で紹介した軒瓦の同範資料調査にあたって、ご協力やご教示を頂いた多くの皆様に厚く御礼申し上げます。

註

- 以下に使用する時期区分は、毛利光・花谷 1991 で提示された編年に拠る。
- 奈良市教育委員会 2019「平城京跡（左京二条四坊十坪）の調査 第 708 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 28（2016）年度』報告文中の「6301 種別不明」が K 種と判明した。
- なお、奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会 1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』掲載のものは 6304 型式 D a 種である。
- 6304 型式 D b 種は、もと 6304 型式 F 種と設定されていた（奈良国立文化財研究所 1978）。その 6 年後に、6304 型式 D 種と 6304 型式 F 種が同範と認定され、F 種が削除された（奈良国立文化財研究所 1984）。2010 年に 6304 型式 D 種には技法上の諸特徴が異なる 2 種があり、これが範の傷みの進行差にも対応するとし、Ⅰ・Ⅱ類に分類された（中井 2010）。翌年筆者は中井Ⅰ・Ⅱ類の分類が彫り直しによるものであることを明らかにした（原田 2011）。中井・原田による 6304 D 型式のⅠ類が D a 種、Ⅱ類が D b 種である。
- 以下、顎部断面形態の分類呼称は毛利光・花谷 1991 に拠る。
- 「粘土板貼り重ね技法」の用語については、原田憲二郎 2014 を参照。なお、この文中で 6574 型式 C 種は、平城京出土重郭紋分類のⅡ b 類に分類した。
- 平城京跡第 775 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。
- 信濃国分寺と平城京の同範瓦については、原田 2016 にまとめた。なお、6734 型式 C 種の呼称は、山崎 2006 の文中にすでに記載があるが、軒瓦型式検討会を経て設定されたものではなかったため、2021 年の軒瓦型式検討会で追認された。
- 平城京跡第 748・767・772 次調査。いずれも奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。
- 平城京跡第 774 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。
- 平城京跡第 748 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。
- 平城京跡第 752 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。
- 2023 年 11 月、大津市埋蔵文化財調査センター青山均氏・木村啓子氏にご協力頂き、石山国分遺跡出土品と実物照合を行った結果、同範と判明した。
- 西隆寺跡第 9 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和 6 年度以降報告予定。

参考・引用文献

石田由紀子 2016「仏餉屋下層遺構出土の東大寺創建以前の瓦」榮原永遠男・佐藤信・吉川真司編『東大寺の新研究 1 東大寺の美術と考古』法蔵館
今井晃樹・林正憲 2023「平城京・藤原京出土軒瓦の新種について」『奈良文化財研究所紀要 2022』奈良文化財研究所
今里幾次 1992「龍野市小犬丸遺跡の古瓦」『布施駅家一小犬丸遺跡 1990・1991 年度発掘調査概報一』龍野市教育委員会
梶山勝 2006「名古屋市博物館資料図版目録 7 大和古瓦図版目録」名古屋市博物館
佐藤亜聖・中原七菜子・税田脩介・安楽可奈子・柿本真琴・乗本愛実・三井淳 2017「伝福寺池発見軒瓦について」『元興寺文化財研究所研究報告 2016』
奈良国立文化財研究所 1975『平城宮発掘調査報告Ⅵー平城京左京一条三坊の調査』
奈良国立文化財研究所 1978『平城宮出土軒瓦型式一覧』

奈良国立文化財研究所 1984『平城宮出土軒瓦型式一覧〈補遺篇〉』
奈良文化財研究所 2016「興福寺境内の調査 第 553 次・第 559 次」『奈良文化財研究所紀要 2016』
中井公 2010「『棚倉瓦屋』で焼かれた瓦をめぐる」『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館
奈良市教育委員会 1987「第 7 次の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和 61 年度』
奈良市教育委員会 1989 a「平城京左京二条四坊二坪の調査 第 157 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和 63 年度』
奈良市教育委員会 1989 b「Ⅲ - 2. 平城京城・周辺のその他の調査 88-10 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和 63 年度』
奈良市教育委員会 1993 a「平城京左京二条四坊三坪の調査 第 260 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 4 年度』
奈良市教育委員会 1993 b「2 元興寺旧境内の調査（3）第 37 次の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 4 年度』
奈良市教育委員会 1998「平城京左京五条五坊十三坪の調査 第 274 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 5 年度』
奈良市教育委員会 2001「平城京左京一条三坊十三坪の調査 第 440 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 11 年度』
奈良市教育委員会 2004「平城京跡（左京五条四坊七・九・十坪）第 459-Ⅰ・Ⅱ - 2・Ⅲ - 3・Ⅳ - 4 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 13 年度』
奈良市教育委員会 2006 a「元興寺旧境内 第 56 次調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 14 年度』
奈良市教育委員会 2006 b「平城京跡（右京二条二坊十六坪）の調査 第 504 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 15 年度』
奈良市教育委員会 2007「法華寺垣内古墳・平城京跡（左京一条三坊四・五坪）の調査 第 520 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 16 年度』
奈良市教育委員会 2009「平城京跡（左京二条三坊十坪）の調査 第 561 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 18 年度（2006）年度』
奈良市教育委員会 2010「平城京跡（左京五条四坊十五坪・東四坊大路）の調査 第 553・565・575・581 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 19 年度（2007）年度』
奈良市教育委員会 2012「平城京跡（左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路）の調査 第 608 次・622 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 21 年度（2009）年度』
奈良市教育委員会 2017「平城京跡（左京五条四坊一坪）の調査 第 626・656・666・667・668・680 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 26 年度（2014）年度』
奈良市教育委員会 2020「平城京跡（左京五条四坊八坪）の調査 第 649・701 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 29（2017）年度』
奈良市教育委員会 2021「平城京跡（左京九条三坊五・六坪）の調査 第 727 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 30（2018）年度』
奈良市教育委員会 2022「平城京跡（左京一条三坊十二・十三坪）の調査 H J 第 733・743 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報令和元（2019）年度』
奈良県立橿原考古学研究所 2007「平城京左京四条三坊九坪（東堀河）の調査」『平城京左京四条四坊・四条五坊発掘調査報告書』
寝屋川市教育委員会 2018『国史跡高宮廃寺跡発掘調査報告書』
花谷浩 2000「京内廿四寺について」『研究論集 XⅠ』奈良国立文化財研究所
原田憲二郎 2002「平城京左京五条五坊十三坪出土瓦製品について」奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 2001』
原田憲二郎 2011「『大安寺式』軒瓦の成立」奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 20 年度（2008）年度』
原田憲二郎 2013「平城京における播磨産瓦出土の背景について」『帝塚山大学考古学研究所研究報告 XⅤ』帝塚山大学考古学研究所
原田憲二郎 2014「平城京の重圈文系軒瓦」『古代瓦研究Ⅵー大官大寺式・鴻臚館式軒瓦の展開・重圈文系軒瓦の展開ー』奈良文化財研究所
原田憲二郎 2016「国分寺造営期における中央と国分寺の同範瓦」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社
原田憲二郎 2020「平城紀寺・葛木寺・海龍王寺前身寺院・済恩院の瓦」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 29 年度（2017）年度』
平松良雄 2008「東大寺千手堂跡の古瓦」『南都仏教』92 号
兵庫県教育委員会 1987「推定布勢駅家跡小犬丸遺跡Ⅰ」
毛利光俊彦・花谷浩 1991「第Ⅵ章考察Ⅰ屋瓦 A 平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 XⅢ』
森郁夫 1983「興福寺式軒瓦」奈良国立文化財研究所『文化財論叢』
保井芳太郎 1928『南都七大寺古瓦紋様集』鹿鳴荘
山崎信二 2006「平城京内出土軒瓦と信濃国分寺出土軒瓦」『古代信濃と東山道諸国の国分寺』上田市立信濃国分寺資料館

図版出典

図Ⅰの 6734 C の薄拓本は山崎 2006、図 3－4 の薄拓本は花谷 2000、図 3－6 の薄拓本は寝屋川市教委 2018 掲載の拓本に一部修正を加え転載。その他は著者作成。